

## 模擬患者を演じてみる

医師の患者と向き合う能力を高めようと、医療面接の実習をする大学が90年代後半から増えてきた。それを支えるのが「模擬患者」。設定された症状や人物像になりきって医師側の問いに受け答えする。医師側にとっては、本物の患者と違って失敗が許され、感想が返されるので、言葉や態度を見つめ直すきっかけになる。演じる側が得るものも大きいと聞き、練習を体験してみた。(佐々木英輔)

模擬患者を育成し派遣する医療人材育成会社「蕉陶塾」(福岡市中央区)を訪ね、社長の黒岩かをさん(56)に体験させてもらった。

「本物の患者だと思うせむせむ。苦笑をしたたりするとリアリティーがなくなります」。終了

後、良かった、悪かったという評価は述べず、この場面でどう感じたかを淡々と述べる。今回の設定は、朝から頭痛が治まらず夜間外来に訪れた、福岡市の32歳の会社員「大橋さん」役。A4判5枚に、症状、薬受診の背景、生

い立ち、性格がびっしり頭に入れる。黒岩さんと同社の勝間田さん(36)に、あんな受け答えをするらどうか。思いを巡らせて態度の悪い医師になっ

# 「頭痛い」訴え空回り



てもうた。「大橋さんお入りください」と呼ばれ、自分は大橋さんだと言いつける。最初は勝間田さんが医師役。「朝から頭痛いんで診断してもらえたか疑問がわいた。」

「こんな痛みですか」「アキアキします」身ぶりを交えて訴えても、勝間田さんはパソコンから視線を離さない。普及が進む電子カルテでも治まらず、17年ぶりの

模擬患者 全国の医学部や歯学部の4年生を対象に医療面接などの共通試験が05年度から始まるのに加え、中堅医師の研修などもあり、需要は増している。蕉陶塾は非営利団体を母体に一昨年12月に株式会社化した。1回3〜4時間程度の講義や練習を7回ほど終ると、独自の模擬患者認定証を発行してもらえ、認定を受けた人の経歴は臨床心理士や演劇経験者、主婦と様々。問い合わせは電子メール info@kintoh-juku.ne.jp、電話 092・741・1805。

受診。訴えたいことや聞きたいことはまだあるのに、引き出す言葉を掛けてもらえないと、意外にも切出しにくい。「外にも違うんです」と食いついたものの、消化不良のまま診察室を後にした。今度は黒岩さんが医者役。「こんな時間に」「そんなに気になるなら明日はいつしよ」と、多少ぶっきらぼう。そんな中、ちよとした相づちや氣遣いの言葉があるだけ救いに感じ、さっきより話しやすいから不思議だ。

「不安なので今晚OTを撮ってもらえないか。明日は仕事で来られない」と聞いてみた。ただ、自分の頭で困った質問だと思いついて、言葉に見えた気がした。

## 求められる 医師像見た

頭痛の模擬患者を演じてみる 3丁目で  
記者 福岡市中央区平尾

取材で患者側の不満はよく聞く。それでも大橋さんの立場に身を置くことで、患者の不安な気持ちや医師に求められる態度の一端が、より具体的に